

『いさよひの日記聞書』

——近世『十六夜日記』受容の様相——

幾 浦 裕 之

要 旨

『十六夜日記』は、岩佐美代子によって九条家旧蔵本（江戸初期写）が古態を示す最善本であることが論証された。しかし『十六夜日記』が多くの読者を獲得し、日記・紀行の名作としての地位を確立した近世において、流布本本文には依然として受容史上尊重するべきものがある。流布本本文成立については不明な点が多い。近世の『十六夜日記』の注釈としては、文政七年（一八二四）の小山田与清『十六夜日記残月抄』がある。一方で、正徳二年（一七一二）を成立の下限とする多和文庫蔵『十六夜日記』、その親本の北海学園大学北駕文庫蔵『いさよひ日記』という、注釈のある『十六夜日記』の伝本があり、松原一義による紹介、翻刻がある。これらは静嘉堂文庫蔵『伊佐宵記』に近似した本文をもつとされる。近年、小川寿一旧蔵本で巻末の識語に「寛文十三年」（一六七三）の年次をもつ『いさよひの日記聞書』（内題。外題は『阿佛道之記』）が早稲田大学図書館に収蔵された。北駕文庫蔵本と同じ注釈であるが、注に異同や増減がみられる。九条家旧蔵本、松平文庫本、静嘉堂文庫本にしかない熱田宮奉献歌の五首目を有し、「この哥一首板の本に落たり」と注にある。万治二年（一六五九）の製版本『十六夜日記』が参照されていることが判明する。ほかにも『伊勢物語集注』（慶安五年刊）に載る和歌が引用されるなど、注の成立にあたっては様々な書物が参照され、十七世紀の『十六夜日記』受容の様相を伝えている。

一 はじめに

『十六夜日記』は著名な日記・紀行文学作品であり、明治期以降多くの教科書にも用いられたが、その本文については校訂上、様々な問題を抱えている。伝本には永青文庫蔵『いさよひの日記』に代表される流布本系統と、異本系統の本文をもつ天理図書館蔵九条家旧蔵本、島原図書館蔵肥前島原松平文庫本の二本がある。九条家旧蔵本は玉井幸助が注目し『十六夜日記評解』の底本に採用しつつも、相当箇所を流布本によって校訂するなど、流布本文を正統とする態度がかつて大勢であった。そのなかで、岩佐美代子によって九条家旧蔵本こそが古態を示す最善本であることが示され、全文が翻刻された。⁽¹⁾しかし、『十六夜日記』が多くの読者を獲得し、日記・紀行の名作としての地位を確立したのは近世になってからであり、そこで流布した本文は依然として受容史のなかで尊重するべきものがある。この流布本文がどのようにして成立したのかについても不明なことが多い。岩佐は、流布本は「宮廷女房文化が衰退して消息文関係の女房らしいもの言いが煩雑、乃至不可解と感ぜられるようになった室町末期に、男性、それも宮廷人というよりは、紀行に興味を持つ連歌師のような人物が関与して改訂されたものではないか」とかつて考察した。流布本文成立をめぐる明らかなにするべきは室町末く近世前期の受容の様相なのである。元禄頃以前の成立とみられる『阿仏東下り』⁽²⁾などの翻案作品の検討など必要であるが、本稿では十七く十八世紀初頭に成立したとみられる『十六夜日記』の注釈から考察したい。近世の『十六夜日記』の注釈としては、文政七年（一八二四）の小山田与清による『十六夜日記残月抄』があり、これが有名である。万治二年刊本『十六夜日記』の本文を底本とし、七本を校合して詳細な注を加えた、『十六夜日記』の初めての本格的な注釈書で、近代以降の『十六夜日記』注釈にも影響を与

えてきた。『十六夜日記』についての論考を近代の受容まで射程にいれて論考を発表されている久保貴子も、『十六夜日記残月抄』には注目されているが、一方で伝本が少ないながら存在しているもう一種の注釈である多和文庫本『十六夜日記』などについては、近世後期書写であることもあって、研究史的にも注意がはらわれてこなかった。本稿ではこのもう一種の『十六夜日記』注釈を聞書注と呼ぶ。聞書注の伝本について最初に紹介した研究は、小川寿一「いさよひの日記聞書」について⁽⁴⁾である。小川は、東京帝国大学附属図書館（国文学研究室）にも、外題を「不知夜日記註」⁽⁵⁾とする一本があつたが、関東大震災で焼失したらしいことを指摘し、自身の架蔵本を紹介している。

家蔵本は、表紙には「阿仏道之記」の題簽があるが、内題は「いさよひの日記聞書」とあつて、美濃型で一面十二行（一枚は二十四行）で、六十四枚から成つている。第一枚表は解題でその裏から初まつていて、本文を二、三行ずつ挙げて、一字下げで註釈してある。続いて「仮名諷誦」（三枚）を収め、本文を一、二行宛を掲げ、註釈を施している。最後（第七十六丁表）に、建治元年ヨリ寛文十三年マテ凡四百年歟此年号ハ前ノ道ノ記ヨリ廿二年前也為家卿の追善歟とある。その面の左下に「兼道以他本校了」と別筆で記されている。これによつて「いさよひの日記聞書」は阿仏仮名諷誦の註をも附載したもので、寛文十三年（一六七三）には出来していたものであることが判る。

聞書注の伝本としては、小川旧蔵本と、北海学園大学北駕文庫本、そして北駕文庫本を書写した多和文庫本の合計三本のみが現存している。現存伝本が少ないだけでなく、それについて論じた研究も、先掲の小川の紹介論文と、松原一義「『十六夜日記』注釈書の新資料の報告―多和文庫蔵「十六夜日記」―」⁽⁶⁾のみであつた。翻刻は松原によつて多和本、北駕文庫本ともに発表されている。小川旧蔵本は所在が不明であつたが、二〇一六年夏に早稲田大学図書館に⁽⁷⁾『阿仏道之記』を外題、「いさよひの日記聞書」を内題とする近世前期写の伝本が収蔵され、稿者が翻刻した。⁽⁹⁾小川の

蔵書印⁽¹⁰⁾である「小川寿／一蔵書」の長方形朱印はないものの、本文や形態的特徴から、これこそ小川旧蔵本ではないかと考えられるのである。小川が部分的に紹介していた伝本が現れたことで、本文全体の内容・形態の精査が可能になった。松原が指摘しているように、聞書注は『残月抄』より先に成立したと見られ、『残月抄』とは大きく異なる、近世前期の『十六夜日記』受容を伝えているのである。

二 『十六夜日記』の聞書注のある伝本とその関係

松原は北駕文庫本・多和文庫本の研究から、両本の聞書注の成立の下限を、両本の奥書にあらわれる正徳二年（一七一二）としたが、早大本は巻末の識語に本文・注釈と同筆で「寛文十三年」という年次がある。早大本は寸法が他両本と比較して最も大きく、書式についても、注が本文と同じ大きさで、かつ能書の手でゆったりと書写されている。両本が近世後期の書写であるのに対し、早大本は書写年代も近世前期のものであり、注釈の成立時に近い書写の伝本と考えられる。早大本聞書注の書誌は次の通り。

『いさよひの日記聞書』（函架番号 へ一〇・七三八〇）

袋綴装一冊。藍色無地表紙、縦二七・〇cm、横一九・五cm。綴糸は後補。外題「阿佛道之記」、内題「いさよひの日記聞書」。外題は本文同筆で、表紙中央の斐紙雲紙原題箋（縦一六・五cm、横五cm）に書かれる。見返し本文共紙、楮紙。後ろ見返し右端の裏面に「阿佛假名諷誦」と墨書直書き（反故を見返しに利用したものか）。前遊紙一丁。下端に蔵書管理に用いたとみられる付箋の痕がある。蔵書印は墨付二丁目右上の「早稲田／文庫」以外なし。字高約二一・三cm。一面十二行、作品本文、注部分も同じ大きさで書かれ、注部分は本文に対して二／一・

五字数分下げ。本文同筆ながら部分的に細字の注もあり、注の増補の過程も窺われる。ミセケチや文字を確定させる傍記あり。文字の下に別な文字がみえる箇所があり、書写の後、親本と校合したとみられる。

墨付丁の内容は以下の通り。一丁表が『十六夜日記』の解題、一丁裏―三四丁裏が路次の記（鎌倉への下向記）、三四丁裏―五五丁裏が東日記（鎌倉滞在記）、五六丁裏―六二丁裏が長歌、六三丁裏―六四丁表が阿仏尼の伝記、六五丁表から―六七丁表が「假名諷誦」の本文、六八丁表―七六丁表が「假名諷誦」注釈。七六丁表に注釈から一行あけ、一字下げて、本文・注釈と同筆で「建治元年ヨリ寛文十三年マテ凡四百年歟／此年号ハ前ノ道ノ記ヨリ廿二年前也為家卿ノ之追善歟」とある。七丁裏に「兼道按打屈したる也つくと書くはあしかるへし」と本文・注釈とは別筆で頭注を書し、最終丁左下に「兼道以他本校了」とある。

小川は、先掲論文において、早大本の識語にみえる人物を、「連歌師猪苗代謙徳（文政三歿）の子の謙道ではなからうか」と考証する。しかしこの兼道というのは、徳島藩士の湯浅兼道と考えられる。それはこの識語の筆跡が、明治大学図書館所蔵『源氏物語聞録』の湯浅兼道の署名と一致するためである。湯浅兼道は、宮本武史『徳島藩士譜』⁽¹²⁾にも載り、天明八年（一七八八）九月四日に没した徳島藩の藩医である。湯浅幸代の「湯浅兼道筆『源氏物語聞録』について」⁽¹³⁾によれば、この源氏物語注釈は、木下長嘯子系の江戸歌人である原安適（？―一七一六）が、徳島藩五代藩主、蜂須賀綱矩（一六六一―一七二八）によって徳島に招かれて滞在した折、徳島藩藩儒の那波魯堂が安適から源氏物語の講義を聴き、その内容をさらに魯堂が湯浅兼道に講義し、兼道が筆録したというものである。

湯浅幸代によれば『源氏物語聞録』は、儒教的言説のみられる近世の源氏物語注釈に数えられるもので、例えば源氏物語の概要を「君臣、父子、朋友、夫婦、兄弟の交わり、菩提のことも、此物語に残すことない也。」と述べる。聞書注にも、冒頭から論語や五倫の道について説く注があり、或いは兼道がこの聞書注を手沢本としたのは、このよ

うな儒教的言説の注に注目した故かとも考えられる。

徳島藩藩医の湯浅兼道の手沢本であることで注目されるのが、北駕文庫本の奥書識語から享受圈を確認すると、やはり徳島藩の人物が関わっていることである。国文学研究資料館のマイクロフィルムにより北駕文庫本と多和文庫本の書誌を次に示す。

・北駕文庫本『いさよひ日記』（小・八八）、マイクロフィルム請求記号16・28・6

袋綴装一冊。横刷毛目表紙、縦二二・七cm、横一六・二cm。外題は表紙左肩の水玉紋様紙に、「いさよひ日記」と墨書。内題も「いさよひ日記」。墨付四五丁。本文は一面あたり九行の大きさ、注釈はその半分ほどの大きさの細字で一字下げで書写される。本奥書「正徳二辰年季冬写之 町尻三位殿」（四四丁裏）、書写奥書「文化十五年寅如月寫／明真（花押）」（四五丁表）、識語「こは父君のいとわかき時の／御筆なり其時代は奥の／識語にものし給ふを見て／あきらかなり 杉園主人」（前見返し）。

・多和文庫本『いさよひ日記』（五・七七）、マイクロフィルム請求記号271・83・2

袋綴装一冊。水玉紋様表紙、縦二四・三cm、一五・七cm。外題は表紙左肩に「十六夜日記」と墨書直書き。内題は「いさよひ日記」。墨付七二丁。本文は一面あたり六く八行の大きさ、注釈は一面あたり十一く十二行の大きさで書写される。本奥書「正徳二辰年季冬寫之 町尻三位殿（七〇丁裏）」「文化十五年寅如月寫／明真（偽花押）（七二丁表）」、書写奥書「明真は西尾安保か家の子也／文政元水無月寫之／仁尾永成（花押）（七二丁裏）」、識語「この十六夜日記は去年の冬阿波國徳嶋の或書肆にて得たるを群書類従本につきて／異同あるを朱もてかたへにかきつけ畢へぬ 于時明治十七年五月九日／琴ひら山の寓居にて 松をかの調（二丁裏）」。

松原一義が北駕文庫本の解題・翻刻で既に指摘しているが、明真（小杉明真、一七九八く一八七七）は、阿波蜂須

賀家の陪審（蜂須賀家老の西尾志摩氏の家臣）である。歌人でもあったようで、宮内庁書陵部には『詠草引付』（二〇・七七四・一二）という、国学者新居正方の詠草に小杉明真が合点したという資料も伝わっている。文化十五年（一八一八）といえは明真は二十一歳で、識語の通り「わかき時」であり、若年時からこのように歌書を書写していたようである。杉園主人というのは、その息子の小杉相邨（一八三四～一九一〇）である。全国の古文書を書写・抄録した『徴古雑抄』（稿本が国文学研究資料館所蔵）、文部省修士館掌記としての『古事類苑』の編纂などで著名な国学者⁽¹⁴⁾である。

多和文庫本にみえる仁尾永成（？～一八四二）も徳島藩士で、先掲の『徳島藩士譜』に確認できる。そして、多和文庫初代当主である松岡調による多和文庫本の識語にも、同本は徳島の書肆で手に入れたとある。以上のように、早大本ほか二本も、手沢や感得識語に徳島という場所が関わっているのである。

それでは、早大本と北駕文庫本の関係はどのようなものだろうか。早大本にわずかにある細字の注から、それを考察してみたい。兼道の識語がある阿仏の出立の場面は、『十六夜日記』諸本間で「うちくつし」か「うちつくし」で異同が生じている。早大本の「うちくつし」のままでよいのだが、早大本はそこに、本文同筆で、ミセケチと「つく」と傍記があり、訂正によってむしろ誤ってしまっている。兼道の識語はそれを指摘したものである。

早大本

したはしけなる人／＼もそてのしつくもなくさめ
かねたる中にも侍従大夫^{びん}などのあなかに

侍従は為相、大夫は為頭なるべし。

兼道按打　うちくつくしたるさまいとこゝろくるしければ

屈したる也　さま／＼いひこしらへねやのうちを見ればむかしの枕

つくと書は　のさなからかはらぬをみるもいまさらかなしくてかた（七ウ）
あしかるへしはらにかきつく

北駕文庫本

したはし気なる人／＼の袖のしつとも慰めかねたる中

にも侍従大夫などのあなちうちつくしたるさま

侍従は為相大夫はいと心くるしければ様／＼言こしらへねや

為顯なるへし

（五オ）

のうちは見れば昔の枕のさなからかはらぬを見るも今

更かなしくてかたはらにかきつく

北駕文庫本は「うちつくし」である。ここだけでなく、早大本の本文同筆のミセケチ箇所と傍記は、ほぼ北駕文庫本に一致する。このことから、早大本は親本以前の段階で、北駕文庫本の系統の聞書注とどうやら校合したらしいことが推測できる。「うちくつくし」から「うちつくし」への誤った訂正も、このような校合で生じたものであろう。

では書式についてはどうだろうか。早大本は本文も同じ大きさで書写され整然としている。一方、北駕文庫本は本文が大きく、注は細字で書かれ、既存の『十六夜日記』の写本の余白に注を書き入れたような印象をもつ。しか

し、北駕文庫本は、「侍従大夫」という本文に対する注「侍従は為相大夫は為頭なるへし」が行頭に書かれ、そのために「いと心くるしければ」という本文が前の行と比べて五字分下がって書写されている。既存の『十六夜日記』の写本の余白に注を書き入れたのであれば、このような書写は起こることは考えにくい。北駕文庫本も、雑然としてはいるが、親本の書式をある程度留めていると考えるべきだろう。同じ「侍従は…」の注は早大本では行間に細字で書かれている。この注も、あるいは早大本が北駕文庫本の系統の聞書注と校合した際に書き入れたものかもしれない。同様の箇所は他にも存在する。

早大本

さらに思ひつゞくればやま注今さらに也と哥の道はたゞまことす
くなくあだなるすさみひはかりとおもふ人もやあらん（二ウ）』

北駕文庫本

さらに思ひつゞくれば 今更に也 やまと哥の道はたゞ誠
少く仇なるすさみはかりと思ふ人もやあらん（二ウ）』

では、早大本と北駕文庫本の注の内容にはどのような違いがあるだろうか。異同が顕著な次の例から見ていきたい。路地の記の終盤、相模路において箱根山を下り、湯坂を越えるという場面である。

早大本

いとさかしき山をくだる人のあしもととまりかたしゆざか
といふなるからうじてこえはてたれどふもとにはや川と言

河ありまことにはやし（三二ウ）

このとの字決前生後の心也　ゆざかは今の湯本の坂をいふにや
からうじては辛勞してこゆるなりはや川今もありこえ

はてたれどとをさへてふもとにまつといふ詞と文字にて聞え

かたきやう也然とも此詞はこえはてたらばこよひとゝまるとこ

ろあるやとおもふにさもなければいひのべたる詞也このと文

字などは上手の文章ならてはをきかたきとの字也かやうの所

文章にゆうありておもしろき物也

北駕文庫本

いとさかしき山を下る人の足も留りかたしゆさかといふなる

からうして越はてたれは麓とに早川といふ川有誠にはやし

ゆ坂は今の湯本の坂をいふにや此坂のふもとに今も早川流たりからうしては辛勞してこゆる也こへ

果たれとゝをさへて麓に早川といふ詞との字にて聞へかたきやう也然共此詞はこへはてたれは

今宵留る所あるやと思ふに麓に早川といふ川ありと也との字にて言のへたる詞也此との

字は決前生後の詞として前の詞をとの字にておさへて又言出す故にまへをけつしてしりへに生すといふ心也

逆接の確定条件を表す接助詞「ど」が、描写の展開において巧みに機能していると評価する注である。それを総括する「このとの字決前生後の心也」が早大本では注の冒頭で述べ、「このと文字などは上手の文章ならてはをきかたきとの字也」と末尾で再度ふれるという双括型であるのに対し、北駕文庫本は「此との字は決前生後の詞として：まへをけつしてしりへに生すといふ心也」と末尾で総括するのみである。このような注の順序・内容の違いはどのようにして生じるのだろうか。しかも北駕文庫本本文は、「越はてたれは」とあり、「と」は傍記しているのであつて、本文には肝心の「と」が現れないのである。双括型か尾括型かどちらのほうが整った注といえるかは判断が難しいところだが、本文に関して言えば、当該箇所は早大本のほうが注と合致しているというべきだろう。

しかし、早大本の注のほうが本文と合致していない例もある。

東路のゆさかを越て見たせはしほきなかるゝはや川の水イ水イ（62）
――すゑ水イ（北駕文庫本）

さなからみやりたる躰也異本に水とあり水といふ

ころより末といふ心増れるにや上句にみわたせばとあれば（三三才）

末といふ心かおもしろきか

「異本に水とあり」と注釈するのだから、被注本文は、北駕文庫本のように「すゑ」（或は「末」であつたはずである（この箇所、九条家本「みつ」、諸本も「水」）。しかし早大本本文は、「水」とし、その下にイ本注記をして、末を

傍書する。早大本は異本本文の「水」を本文文化して書写するという違いはあるが、早大本も北駕文庫本も、本文の和

歌の結句は、他の『十六夜日記』諸本にはみられない「早川の末」であつたらしい。ここからは、早大本と北駕文庫本は、共通祖本をもつことを窺わせる。だが、どちらかがどちらかを写した、ということがわかる要素はない。わかるのは、先に述べたように、早大本が親本以前の段階で北駕文庫本の系統の聞書注と校合したということである。

一方、早大本の注のほうに誤字がある例が三例ある。次に示す例1には、早大本では、「此ころのおほかたの名は」という、「と」が脱落したとみられる箇所がある。

例1

今宵はひきまのすくといふ所にとまる此ころのおほ

かたの名ははま奈とせいひし（二三才）―處（北駕文庫本）

北駕文庫本では、漢字で「處」とある。文意からは「處」のほうがふさわしい。

例2は、式乾門院御匣という女房歌人についての注で、早大本では「此御匣ゆへ哥人なり」という意味の通らない注がある。

例2

式乾門院のみくしけとのときこゆるは久我○大政大臣の

御むすめこれも續後撰よりうちつゞきふたゝひ

みたひの集のうちきゝにも哥あまた入たまへる人な

れは御名もかくれなくこそ

（中略）式乾門院は後高倉院の皇女利子也八十五代後堀川

院の御妹也 (三七ウ)

御母は北白河院殿と云也久我太政大臣基家公の御女み

くしげ也此御匣ゆへ哥人なり

―御匣殿ハ哥人なり (北駕文庫本)

同箇所は、北駕文庫本では「御匣殿ハ哥人なり」とある。おそらく、早大本の「ゆへ」は、北駕文庫本の注のように親本に「殿」とあった字を、字体の似た「故」と見間違えて、書写したのではないだろうか。

例3は、阿仏が為家の妹、和徳門院新中納言に、亡き為家を夢に見ると消息にて語る箇所である。

例3

―草の枕 (北駕文庫本)

と聞ゆそのつゐでに古入道大納言夢の枕にも立添

て

為家卿なり (五〇ウ)

ゆめに見えさせ給ふよし^ンなと

在鎌倉にて見る夢なれば草の枕にも立添てと

いへり

早大本は、「草の枕」とあるべきところを、草に字形の似た、「夢」という字に誤写している。この「夢の枕」という誤写は他の『十六夜日記』諸本にはみられない。

以上のように、書式からは整然と書写された印象をうける早大本のほうに誤写している箇所があることも注意すべきである。一方で、北駕文庫本のほうは、作品本文を二行書き落としており、それに伴って注にも脱文がある。早大本にはこのような脱文はない。このことから、早大本から北駕文庫本が、或いは、北駕文庫本から早大本が書写され

たことは、考えられない。ただし、以上の述べたことをまとめて図示すると、少なくとも左の図のような関係性を想定できるのではないだろうか。

「ところ」「殿」「草」を誤写

A 早大本の親本——早大本

校合して訂正と

共通祖本

ミセケチ

脱落数行

B 兼量書写本——転写本——北駕文庫本——多和文庫本

三 聞書注の『十六夜日記』本文部分の性質

次に、聞書注に書写されている『十六夜日記』の本文が、現存伝本のなかでどのように位置づけられるのか、また合写される作品の組み合わせや奥書（識語）は、どの伝本と類似しているのかについて確認したい。

『十六夜日記』は主に路次の記（関東への下向記）、東日記（鎌倉での滞在記）、長歌から構成され、伝本によってはさらに『阿仏假名諷誦』が合写される。主要な伝本でもその全てを合写していないものもある中で、聞書注はこの全てを合写している。他にも、長歌のあとに附属する二種の奥書が書写されていることなどから、聞書注、なかでも

早大本は、静嘉堂文庫本に近似している。聞書注に關係する『十六夜日記』の主要な伝本の合写の状況を次に示す。

日記解題 路次の記 置文和歌 東日記 長歌 奥書一 奥書二 阿仏假名諷誦 阿仏假名諷誦注

九条家旧蔵本 有 有 有 有 有 有 有

松平文庫本 有 有 有 有 有 有

静嘉堂文庫本 有 有 有 有 有 有

（流布本）

永世文庫本 有 有 有 有

古活字版 有 有 有 有

万治二年版本 有 有 有 有

（聞書注）

早稲田大本 有 有 有 有

北駕文庫本 有 有 有 有

多和文庫本 有 有 有 有

奥書一というのは、長歌中の句である箇所（早大本で示す）、

のこるよもぎと かこちてし 人のなさけも

かたりけり

君ひとり跡なきあさの数しらば残るよもぎのかずをことはれ

此哥の事也。こしべの尼公の歌なり。次にくはし。(六二才)

の「裏書」にあつたという次のような識語であり、従来後人によって書かれたとみられているものである。俊成卿女が越部庄の領有権の侵害に遭った際、「君ひとり」の和歌を詠進して訴訟・評定もなく地頭の非法を制止したという歌徳説話が述べられている。これは九条家本では長歌とともに存在しない。この奥書一にも伝本間に異同があるのだが、江口正弘編『十六夜日記校本及び総索引』⁽¹⁵⁾を参照して対校すると、早大本は静嘉堂文庫本にある異同とほぼ一致していることがわかる。⁽¹⁶⁾

残るよもぎとかこちける所の裏書に、皇太后宮

皇太后宮(他)―皇太宮(静)

太夫俊成卿の御女、父の譲とて、播磨國こしべの庄と云

俊成卿の(静・学など)―俊成の(他)

所をつたへしられけるを、さまたげてむさしの前

けるを―(静・万・古など)けるを地頭の(他)

さまたけて(静)―さまたけ(他)

ナシ(静)―おほくて(他)など

むさしの(学・静・慶)―昔むさしの(他)

司へことなる訴訟にはあらで、まいらせられける哥

哥は(静)―文に(他)

は、新勅撰にも入侍るとやらん。心のまゝのよもぎのみ

侍ると(静)―て候(永)、て(古、万など)

してといふ御哥を、かこちて申されける哥、

君ひとりあとなきあさの数しらば残るよもぎの数をことわれ (119) 　よもきの (静) — よもきか (他)

とよまれければ、評定にもおよばず、廿一ヶ條の地頭の

ひほうを、みなとゞめられけり。そのうち、野中のし〇をすぐ
* 　　られけり (静) — られて候けり (他)

とて、

わすられぬもとの心を知がほに野中のし水かげ〇だにみじ (120) 　をしりかほに (静) — のありかほに (他)

とよまれたるも、そのこしべのせうへ、くだられけるときの (六三才)

哥也。新勅撰に入て侍りし。 　　うたなり (静) — 歌にて候 (永など)、哥にて (他)

永仁六年三月一日書之

ナシ (静、学など)

そして奥書二は引用を省略するが、九条家本、永世文庫本、北駕文庫本、多和文庫本に存在しない、阿仏尼の伝記である。この奥書二も伝本間で異同があるが、早大本では学習院大学本、慶応義塾大学本、静嘉堂文庫本と共通する。聞書注の『十六夜日記』本文と静嘉堂文庫本の近さについては、松原一義が多和文庫本の本文について「他のどの本より静本に近接している」ことを既に指摘している。また、松原の『阿仏仮名諷誦』の本文系統の整理においても、北駕文庫本、多和文庫本、静嘉堂文庫本は同じ系統に整理されている⁽¹⁷⁾。

では静嘉堂文庫本とはいかなる伝本なのだろうか。静嘉堂本の本文の重要性について詳細に検討した森井信子の⁽¹⁸⁾論考は、「静嘉堂本は混合写本であり、主な親本として、九条家本・慶應大学蔵本・学習院大学蔵本・古活字本が用いられたであろうと推測する。更に述べるならば、数本ある親本の中の良い部分を取り入れていくという書写態度を考慮すると、整定本とも言い得る。そして、奥書などに書写年代は記されていないが、これらを親本と考えた場合江戸初期から中期頃ではないかと考えられるのである⁽¹⁹⁾」と結論付けている。静嘉堂文庫本の書誌を以下に示す。

袋綴装一冊。茶色無地表紙、縦二二・六cm、横一九・八cmの枡型本。綴糸は後補。江戸前〜中期写。外題「伊佐宵記」、内題なし。外題は本文同筆で、表紙中央の金銀野毛もみ箔散らしの原題箋に書かれる。見返し本文共紙、楮紙。遊紙なし。蔵書印は「松井氏／蔵書印」、松井簡治旧蔵本。字高約一六・〇cm。一面十二行。和歌一字下げ。上の余白がやや大きく、仮綴じのまま上遍の化粧断ちを控えたものであろうか。墨付丁の内容は以下の通り。一丁表〜一九丁裏が路次の記、一九丁裏〜三二丁裏が東日記（鎌倉滞在記）、三二丁裏〜三四丁裏が長歌、三五丁表〜三六丁表が奥書一、三六丁裏から〜三九丁裏が「阿佛房のかなふしゆ」（内題）の本文である。東日記の終わりと長歌の間には一行空けもなく続けて書写される。長歌は一行あたり三句書きで、句間は一文字分空けている。奥書一の末尾の「永仁六年三月一日書之」がなく、奥書二が奥書一の「新勅撰に入て侍り」に続けて書写される。

一筆書きで能書の手で丁寧に書写されているが、90番歌「くらべ見よ」だけ二字下げを忘れて地の文と同じ高さから書いてしまっている。

聞書注の本文で注意されるのは、熱田宮への奉献歌の五首目が載ることである。この五首目の和歌は、静嘉堂本、九条家本、松平文庫本のみにあるもので、他の諸本にはないものだからである。

契りあれやむかしもゆめにみしめ縄たゞ爰にしもめぐりあひぬる（121）

この哥一首、板の本に落たり。哥の心は、むかし三河の國宮路山まで、阿佛の、父と友なひて、くだり給ひし時、

この熱田をとをり給ふゆへに、ひさしき事なれば、むかし

もゆめにみたると也。今又二たび拜み奉るべき契り

なれや、となり。みしめ縄、心にかけてといひて、むかし

しの契りにめぐりあふと、夢に對していへり。（一八才）

岩佐美代子は、五首揃っている本文を、九条家本が阿仏の原作の古態を保っていることの証左の第一に挙げている。この五首目について、聞書注には「この哥一首板の本に落たり」と、万治二年（一六五九）の整版本『十六夜日記』を披見しているらしい注がある（古活字本でもこの五首目は脱落している）。同箇所は北駕文庫本では「おほかたのほんにおちたり」となっており、披見したのが版本かどうかは不明である。ただし注意されるのは、聞書注の「みしめ縄、心にかけてといひて」という箇所は、被注本文の和歌にそぐわず、むしろ静嘉堂本の「心にかけて」や、九条家

本、松平文庫本の当該歌の四句目「こゝろにかけて」に合致していることである。これは、聞書注の被注本文が誤写を起しているか、被注本文と聞書注は別の成立、つまり既存の『十六夜日記』のある写本（「たゞ爰にしも」という本文が書写された写本）に、注を書き入れることで、この『いさよひの日記聞書』というものが成立したことを窺わせる。なぜこのようなことが生じるのだろうか。おそらく、聞書注の成立のもとになる、『十六夜日記』を講釈する場があつたとして、講釈者のもっていた伝本と、講釈を筆記する者の持っていた伝本には異同があり、聞書注は後者の伝本をもとに書写されていたのが現存伝本、つまり早大本と北駕文庫本なのである。

また、次の注からは、聞書注が成立するにあたって、注の説を述べている人物は、万治二年版本に限らず、複数の『十六夜日記』を披見しているらしいことがうかがえる。

東路の桜をみてもわすれずは都の花を人やとはまし（92）

みやこ人の哥の返し也。心明らか也。いづれの本にも、返哥

四首あり。（四六才）

では、聞書注の早大本の『十六夜日記』本文が、静嘉堂本へ近接している度合いは、実際はどの程度なのだろうか。早大本と静嘉堂本との異同を示し、当該箇所が、現存伝本のなかで最も古態を留める九条家本ではどうなっているかを以下に示す。まず早大本の本文と丁数（オモテ／ウラ）を掲出し、下に静嘉堂本、九条家本⁽²⁰⁾の異文を示す。早大本と一致している場合は、早大本本文の下に（静）（九）で示した（漢字、仮名の別と清濁は校異を略す）。

（路次の記）

- 2 ウ さらに思ひつゞくれば（九）――さらはおもひつゞくれば（静）
- 4 オ みちをたすけよ子をはこくめ――道をたすけよ子をはくゝめ（静・九）
- 4 ウ いゑをたすけんおやこの命もろとも――家をたすけんおやこの命も諸共（静・九）
- 5 オ みちをかへりみるうらみは（九）――道をかへりみるかきりは（静）
- 6 ウ さりとは文屋の康秀かさそふ水にもあらず――さりとは文屋康秀かさそふにもあらず（静）・さりとは文屋のやすひてかさそふにもあらず（九）
- 7 オ な〇となくいそぎたちぬ――何となくいそぎたちぬ（静・九）
- 7 ウ したはしけなる人――も、――したはしけなる人との（静・九）
- 7 ウ うちくつしたるさまいとこゝろくるしければ――打つくしたるさまいとくるしければ（静）・うちくむしたるさまいと心くるしければ（九）
- 7 ウ ねやのうちを見れば――ねやのうち見れば（静）・ねやのうちをみやれば（九）
- 8 オ 代々にかきおかれる哥の――代々にかきをかれたる哥の（静）・代々にかきをかれける哥の（九）
- 8 ウ 是をむかしの形見とも見よ――是をむかしの形見とは見よ（静・九）
- 9 オ むかしの人にきかせてまつりたくて（九）――昔の人にきかせてまつりたく（静）
- 9 ウ 山よりししうのあにの律師も――山より侍従の兄の律師（静）・山より侍従のあにのおりしも（九）
- 10 オ それもいと心ほそしとおもひたるを――それもいと物心ほそしとおもひたるを（静・九）
- 10 オ この手ならひともを見てまたかきそへたり（九）――此手ならひともを見てかきそへたり（静）

10 才 あぎりの君は山伏に候―あさりの君は山ふしてにて（静）あさりの君は山ふしにて（九）

10 ウ をくり奉らんとていてたたるめるを―をくりたてまつらんとて出たるを（静）・をくらむとていてたるめるを

（九）

11 才 むまれ給ふことにて―むまれ給ひし事にて（静）・むまれたまへりしはかりにて（九）

11 才 ふる里に残るなてしこ（九）―ふるさとののこるなてしこ（静）

11 ウ 哥の御返事には―哥の御返事は（静）・哥の返しには（九）

12 才 おこがましけれど（九）―おこがましく侍れと（静）

12 才 あふさかの関こゆるほにも―あふさかの関こゆるほに（静）あふさかの関こゆる程も（九）

12 ウ さためなき命はしらぬ旅なれは―さためなき命はしらぬ旅なれと（静・九）

12 ウ 日はくれかゝりていとものかなし（九）―日はくれかゝるていとはかなし（静）

13 才 つくへしとさだめつれど（九）―つくへしとさだめつれとも（静）

14 才 十七日は―十七日の夜は（静）・十六日夜は（九）

14 才 霧のまよひにたとりいてつや―霧のまよひにたとり出つ（静・九）

14 ウ うき世のゆめや醒か井の水―うき世の夢をさめか井の水（静）うき世の夢をさめか井の水（九）

16 才 十九日またこゝをいて〇ゆく―十九日又こゝをいてゝ行（静・九）

17 才 一の宮なさやなつかし―一の宮名さへなつかし（静・九）

17 才 廿日おはりの國におもとゝいふ―廿日おはりの國おもとゝいふ（静）・廿日おはりの國おりとのむまやを（九）

17 ウ かたひくしほも波のまに／＼―かたひくしほも神のまに／＼（静・九）

17 ウ おなし心に神もうくらん（九）——おなし心に神もうつらん（静）

17 ウ みつ塩のさしてうきつる——みつしほのさしてそきつる（静・九）

18 オ 我ゆくさきのさはりあらすな——我行さきのさはりあらすな（静・九）

18 オ みしめ縄たゝ爰にしもめぐりあひぬる——みしめなは心にかけてめぐりあひぬる（静・九）

18 ウ すみた川のわたりにこそありときゝし——すみた川の渡りにこそありときゝしかと（静・九）

19 オ くらさにはしも見えすなりぬ（九）——くらさに橋も見えず（静）

19 ウ 風につれなきところ——朽葉にそめかへてげり——風につれなき所ともみち葉にそめかへてげり（静）・風につ

れなきくれなゐ處とくち葉にそめかへてける（九）

20 オ 紅葉の錦色かへるまで（九）——もみちのにしき色かへるとて（静）

20 ウ 山のすそ野に竹の在所に——山のすそ野に竹のある所に（静）・山のすそ野に竹ある所に（九）

21 オ 廿二日あかつき夜ふかきあり明のかけに——廿二日のあかつきは夜ふかく有明のかはかり（静）・廿二日の晩夜

ふかきあり明のかけに（九）

21 ウ 旅人のおなし道にや出ぬらん——旅人のおなし道にや出つらむ（静・九）

22 オ むれゐたるはうといふ鳥なりけり——むれゐたるは鵲という鳥（静）・むれゐるは鵲といふとりなりけり（九）

22 ウ 岩の上にもいたり——岩のうへにもあたり（静）・岩のうへにも居たり（九）

23 オ ひきまのすくといふ所に——ひきまのしゆくといふところに（静）・ひきまの宿といふ所に（九）

23 オ 此ころのおほかたの名は——此所のおほかたの名は（静・九）

23 ウ みしなみをむかしをそとふ——見し人なみにむかしをそ思ふ（静）・見し人なみにむかしをそとふ（九）

- 23 ウ 廿三日天竜のわたり―廿三日天りうのわたり（静）・廿三日てんちうのわたり（九）
- 24 ウ 廿四日ひるになりてさやの中山こゆ（九）―廿四日ひるになりてさやの中山こゆに（静）
- 25 オ ことのまゝとかやいふやしろ―とのまゝとかやいふやしろ（静）・とのまゝといふやしろ（九）
- 25 オ きく川といふ所にとゝまる（九）―きく川といふ所にとまる（静）
- 25 オ 松風おくるさやのなかやま―まつ風をくるさよの中山（静・九）
- 27 オ たゝやむことなき所ひとつにぞおとつれきこゆる（九）―たゝやんことなき所ひとつにそをとつれきこゆ（静）
- 28 オ 澳津のはまに打いづ（九）―おき津のしまにうちいつ（静）
- 29 ウ 波たゞ枕の上に立さはぐ―なみたたまくらうへにてたちさはく（静）・なみたゝ枕にたちさはく（九）
- 30 ウ 誰か方になひきはてゝかふしのねの（九）―誰かかたになひきはてゝふしのねの（静）
- 30 ウ 一つの世のふもとのちりかふしのねの―一つの世のふもとのちりかふしのねを（静）・一つの世のふもとのちりかふしのねの（九）
- 31 ウ 伊豆の府といふ所にとゝまる―伊豆のこうといふところにとゝまる（静・九）
- 31 ウ よ〇てたてまつる―讀てたてまつる（静）・よみ〇たてまつる（九）
- 32 オ 廿八日伊豆の府をいて―廿八日伊豆のこうを出て（静・九）
- 32 ウ ゆかしさそそなたの雲をそばたてゝ―ゆかしさそそなたの雲をそばたてゝて（静・九）
- 33 オ はや川の水水いはや川の水（静）・はや川のみつ（九）
- 34 オ あけはなるゝ海つらを―あけはなるゝ海の上を（静・九）

《東日記》

35 ウ ありし御返しと—ありし御返事と（静・九）

36 オ おぼしめしわすれさりけるにやいとやさしく—おほしめしわすれさりけるにやといとやさしく（静）・おほし
わすれさりけりにやいとやさしく（九）

36 ウ なみたしくるゝ袖やいかにと（九）—なみたしるゝそてやいかにと（静）

38 ウ 北白河とのへまかりしかど—北白川殿へまいたりしかと（静・九）

38 ウ 心にかゝりてをとつれきこゆ—心にかかり給て便にをとつれ聞ゆ（静）・心にかゝり給ひてたよりにをとつれ
きこゆ（九）

38 ウ 雪のひまなさなと—雪のひまなさと（静）・雪のひまなさなと（九）

39 オ その御かへり事—その御返り（静）・その御返事（九）

39 オ たよりあらばとこゝろがけまいらせつるを—たよりあらはと心にかけまいらせつるを（静）・たよりあらはと
心にかけまいらせさふらひつるを（九）

39 ウ のちにそかゝる事—後にそかゝる御事（静）・のちにこそかゝる御事（九）

40 オ と押はかり御返しは—とをしはかり御返事は（静）と候し御返事は（九）

40 ウ 御かへりをそ聞ゆる—御返はかりをそきこゆる（静）・御返事はかりをそきこゆる（九）

41 ウ いと哀にてみればあね君—いとあはれにて見ればあね君（静）・いそきみればあね君（九）

42 ウ 霞こめたるなかめのたど／＼しき深谷の—かすみこめたるなかめのたど／＼しき深谷の（静）・かすみこめた
るなかめのすゑはいと／＼したにの（九）

- 42 ウ うくひすの初音をたにも―鶯の初音たにも（静）・鶯のはつねたに（九）
- 43 オ また都のたよりありとつげたる人あれば（九）―又都のたよりあれば（静）
- 43 オ れい／＼の所／＼への―れいのところ所への（静）・れいの所／＼へ（九）
- 43 ウ まきるゝ事なく哥をよみ給ふ人なれば―まきるゝ事なく哥をのみよみ給ふ人なれば（静）・まきるゝ方なく哥をのみよみ給ふ人なれば（九）
- 43 ウ かきあつめてたてまつる（九）―かきあつめてまつる（静）
- 44 オ いかにしてしはし都のわすれがひ―いかにしてしはし都をわすれ貝（静）・いかにしてしはしみやのわすれかひ（九）
- 44 オ 花くもり詠てわたる浦かせに―はれくもりなかつてわたる浦風に（静）・はれくもりなかつてわたる浦風に（九）
- 44 ウ 東路の磯山かせのたえまより―東路の磯山松のたえまより（静・九）
- 45 オ たゝ筆にまかせて思ふまゝに―たゝ筆にまかせてうちおもふまゝに（静・九）
- 45 オ ほともへすへんし給へり―又ほともへす返事し給へり（静・九）
- 45 オ かすみはれぬるこゝちしてなどあり（九）―かすみはれぬる心ちしてなど侍り（静）
- 46 オ 三度になりぬへき（九）―二たひになりぬへき（静）
- 46 ウ なこりもなくおちたる折しも―名残もなくたちたるおりしも（静）・なこりもなくおちたりおりしも（九）
- 46 ウ かゝる事こそなど（九）―かゝる事など（静）・かゝる事こそなど（九）
- 46 ウ れいの榊中納言の御もとへ（九）―れいの中納言の御もとへ（静）
- 47 ウ 去年の春夏の恋しさ（九）―こそはるなつのこひしき（静）

- 47 ウ かはらさるらめ暮はてし（九）——かはらさるらめ暮はてゝ（静）
- 48 オ その御返しまたあり——その返事又あり 打捨られ奉りし後は（静）・その返し又あり（九）
- 48 ウ さるほどに卯月のすへになり○けれど——さるほどに卯月の末に成にけれど（静）・さる程に卯月もすゑになり
にけれど（九）
- 48 ウ 雲井に高くいつかなのらん（九）——雲井にたかくいつるなのらん（静）
- 49 オ な^ンとひとりおもへともそのかひなし——なとひとり打おもへともそのかひもなし（静）・なとひとりこちつれと
そのかひもなし（九）
- 49 ウ 船な^ンとよみ給へりし——ふねなとよみ給り（静・九）
- 50 ウ ○文の言葉つゞけて——とふみのこと葉つゞけて（静）・とふみことはにつゞけて（九）
- 50 ウ 御かへしは——御返事は（静・九）
- 50 ウ 夢の枕にも立添て——草の枕にもたちそひて（静）・草の枕にもつねにたちそひて（九）
- 51 オ かき付てたてまつる——かきつけたてまつる（静）・かきつけたてまつるとて（九）
- 51 オ はかなしや旅ねの夢を——はかなしやたひねの夢に（静・九）
- 51 オ な^ンとかきたてまつりたりしを——なと書て奉りたりしを（静・九）
- 51 オ かへし給へり——返事給へり（静）・返事し給へり（九）
- 51 オ さしも忍ひたまへりしも——さしものひたまふも（静）・さしものひ給事も（九）
- 52 オ 八月二日そたより待^{はつき}ゑて——八月二日そたしかなるつかひまちえて（静・九）
- 52 ウ 侍従さいしやうの君のもとより——侍従宰相の許より（静）・侍従ためすけの君のもとより（九）

53 ウ また〇五十首の―又此五十首の（静）・五この五十首の（九）

54 オ これを見はいかはかりとか思ひつる―これを見はいかはかりかとおもひつる（静）・これを見はいかはかりと
かおもひ出る（九）

54 オ 二十首の哥ををくりて―三十首の哥をおくりて（静）・廿首の哥ををくりて（九）

55 オ 東路の空なつかしき形見には―東路の空なつかしきかた見たに（静・九）

55 オ 此御返し―此御返事（静）・この御返（九）

55 オ 恋しさなとをかきて―恋しさなと書て（静・九）

（長歌）（九条家本には長歌なし）

56 ウ 神楽の言葉 うたひてし―かつらのこと葉 うたひてし（静）

57 ウ みかとのまゝ したがりて―みかとのまゝに したかひて（静）

61 オ たゝすの森の ゆふしでに―たゝすの森の ゆふしては（静）

（阿仏仮名諷誦）

65 オ 假名諷誦―阿佛房のかなふしゆ（静）・安嘉門院四条局假名諷誦 阿仏禪尼（九）

65 オ 過る月日も思ひわかぬに―すくる月日もおもひよらぬに（静）・過る月影も思ひわかぬに（九）

65 オ 大空をのみかこてども（九）―大空をのみかこてとも（静）

65 オ ふたとせはかりやたらさりける―二とせはかりやたらさりける（静）・二とせはかりやたらさりけん（九）

65 ウ くらゐはおほきふたつの所にのぼり―位はおほき二のしなにのほり(静)・くらゐはおほき二の品にのほる(九)
65 ウ かげのかたちにしたかふためしなれど―かけのかたちにしたかふためしなれと(静)・影のかたちにしたかふ
ためしなれは(九)

66 オ 三とせはかりにもやなりにけん―三とせはかりにや成にけん(静)・みとせはかりにや成にけん(九)

66 ウ 夢をたにもみすうつゝにとまる―夢をたにも見えうつゝにとまる(静)・夢をたにみすうつゝにとまる(九)

66 ウ かきあらはしたてまつる―かきあらはしたてまつる(静)・かきあらはし奉る(九)

66 ウ 阿弥陀経は―阿弥陀経は(静・九)

66 ウ かたぎをそつす―かたぎをうつす(静・九)

66 ウ 仏経は(九)―ほけ経は(静)

66 ウ 命とともに―すなはちともに(静)・命と共に(九)

以上のように、早大本が静嘉堂文庫本と異なる箇所は一二九箇所を数えることができる。うち、早大本が九条家本と一致し静嘉堂本と異なる箇所が二七箇所、九条家本・静嘉堂本間で一致していて早大本と異なる箇所が三五箇所ある。

仮に聞書注の成立にあたつて静嘉堂本、或いはそれに近い本が披見されていたとしても、静嘉堂本の本文の誤りは校訂されているとみられる。

四 聞書注の成立時期と参照される書物

では聞書注の成立時期について、注釈で言及される人名、地名、書名からはどのようなことがわかるだろうか。松原一義は、「多和本の注釈に引かれた文献は、いづれも「玉葉集 正和元年（一一三二）成立」以前のものである。（中略）多和本は、正和元年（一一三二）以降、正徳二年（一一七二）以前に成立している。」と見積もっている。さらに、「多和本の成立は、正徳二年よりずっと以前、つまり、中世までさかのぼることとなる」とし、既に冷泉家内に成立していた注釈が、寛文年間までに書写された冷泉為経筆の『十六夜日記』に付加されたものを、本奥書にみえる町尻兼量が書写したのではないか、と想像をめぐらせている。

その理由のひとつは、次に示すような歌書が引用されているからであるという。

古文孝経、記紀、万葉集、古今集、古今六帖、後撰集、新古今集、新勅撰集、小町集、兼輔集、源氏物語、伊勢物語、長恨歌、壬二集、続古今集、続後撰集、続拾遺集、玉葉集

しかし、以上の書名が直接、注で言及されるわけではない。しかも細かくみていくと、注に言及される人名、地名、書名から、成立年代は徐々に下つていき、おおそ寛文年間に成立したのではないかと考えられるのである。以下、このことについて検討していきたい。次に示すのは、清見潟にて富士を遠望する場面で、冷泉家二条家の古今集仮名序をめぐる両説について述べる注である。

ふじの山を見れば、煙もたゝず。（二九ウ）

けぶりもたゝずの詞、種々心有。不立の心にや。古今の序に、今はふじの山のけぶりもたゝずなりとあり。此たゝずの言葉に、不立不斷の両義ありとなく、古今集にをみて口傳あることゝ聞ゆ。さありとも、爰の詞は不立とみるべきにや。次の詞にふじのけぶりの末も、朝夕慥に見えし物を、いつの年よりかたえしとあり。猶次の哥にて分明なり。

扨又、二条冷泉両家のかはりめありと、諸抄にもしるされたり。先

二条家には、不斷の説を用ひきたれるにや。冷泉家には、不立の心に用ひられしとにや。冷泉の為廣卿などの哥に不立の

心によみ給へる哥もあるなり。こゝはそれにはよるべからず。古今傳受の事なれば、手を付てもよしなくや。先あらましをいへる物也。

ここでは、冷泉為広（一四五〇～一五二六）について言及されている。松原は「冷泉家の指導書が、このような「聞書」として広まった。」と考察しているが、しかし、聞書注は冷泉家周辺や冷泉家の門弟の手になるものなのかといえ、不審な点もある。鎌倉滞在記のなかの、権中納言為子との文のやりとりを記す場面で「このせうとの、為かぬの君も、をなじさまに、おぼつかなさなど、かきて」という本文には、「せうとは、兄也。権中納言の兄歟。為兼は、為教の一男なり。此為兼、冷泉家の元祖也。」と、為兼を冷泉家の元祖とする注がある。歌道家周辺の手になるものであれば、このような誤解は起こらないのではないだろうか。しかし一方で、聞書注は阿仏尼に一貫して敬語を用い、歌人としても文章家としても讃えている。近世前期に阿仏尼をそのように扱う人物が冷泉家と無縁だとはやはり考えに

くい。

また、早大本では、小田原のまりこ川、現在の酒匂川を渡る場面で、次のように天文二〇年（一五五一）ごろ成立した小田原宿⁽²²⁾について言及している。

まりこ川といふ河を、いとくらくてたどりわたる。こよひは、さかは
といふ所にとゞまる。あすはかまくらへ入べし、といふなり。

まりこ川は、今のさ河といふかはなるにや。この時分には、今の小田
はらといふすくには、やどりもなかりしとみえたり。（三四才）

小田原宿について言及する注は、北駕文庫本・多和文庫本にはない。

また、次のような注がある。聞書注は阿仏尼の親族関係についても委しくはないようで、源承を阿仏の子だと誤解している。注目されるのは、その箇所で証歌に引かれた和歌である。

あざりの君は、山伏に候。此人くよりは、あになり。（二〇才）

阿闍梨なり。名を源承といへり。續拾遺集の作者也。

このたびの、みちのしるべに、をくり奉らんとて、いでた
たるめるを、この手ならひに、またまじらはざらん

やは、とて書つく。

書附る也。

まじらはざらんやは、まじらんと云詞也。やはのてにおは、
皆此心持にみるべき也。

立そふぞ嬉しかりける旅衣形身にたのむ親のまもりは（9）

阿闍梨の哥也。前に旅衣立帰るとあるをうけて、たち

そふぞと也。このあざり、阿仏の供して道の案内に

鎌倉まで送給ふゆへに、立そふぞ嬉しきと也。かたみ

は衣の縁也。親のまもりとは、阿仏をいへり。おやは子を守り

めぐむゆへなり。（二〇ウ）』

唐國のむかしを聞もたらちねの親のまもりの在世とぞおもふ

この「唐國の」という和歌は、次に示すように、『伊勢物語集註』にみられる一首なのである。

むかしわかきおとこけしうはあらぬ女を思ひけりさかしらすおやありて思ひもそつくとてこの女をほかへをひ
やらんとすさこそいへまたをひやらす

○さかしらする親おやとは媒なかつちありて聘礼へいれいをおこなひ法のごとく親のいひ定め事なれば女むすめに和讒さかしらする也。師云、詩

経三。蠨蛸ていと篇曰女子有行遠父母兄弟云々。この心は女子は生れて人ひとに適ゆくの道あるに何ぞ不嫁なづかことを憂うれて淫奔いんほん
の過とがをするぞと也。父母の命をうけこれをおこなはぬを淫奔いんほんと云。

から國の昔をきくもたらちねの親のまもりのある世とぞ思ふ

『伊勢物語集註』は京都金光寺の僧切臨が、師である一華堂乗阿が伝えた説を宗として、諸注釈書を集成して慶安元年（一六四八）に成立、慶安五年に刊行されたものである。⁽²³⁾『近世伊勢物語』注釈書のなかでも特に好色批判がみられる注釈で、「知識の誇示が目的であるかのような、『伊勢物語』本文とほとんど関係が見られない引用例も確認される」⁽²⁴⁾という瀬尾博之の指摘がある。聞書注の北駕文庫本ではこの「唐國の」歌の引用につづいて「という古歌あり」とあり、何を披見して引用したかは早大本と同じく定かでない。

では、現存の聞書注が固定した下限はいつごろと考えられるだろうか。注が引用する内容や書名についてさらに見ていきたい。松原は聞書注について「多和本は、歌論的色彩の強い書、すなわち、歌学系統の人の手になった注釈書であつたろうと考えられる」と考察している。しかし、松原が指摘していないが、多和本・北駕文庫本の注にもある書名としては、次のようなものがある。

日は入はてゝ、なをものゝあやめもわかぬほどに、わたうとかや
いふ所にとゞまりぬ。

ものゝあやめは、あやもみえぬ也。猶古今集恋の一卷頭、なく
やさ月のあやめ草の哥の注にくはし。畧のわたう

といふ所、書写誤にてしりがたし。勅撰名所にもみえず。（二二才）

三河の國渡津^{わたつし}にて宿泊する場面にて、「と」が脱落した「わたう」という地名について「勅撰名所にも見えず」と注する。これは一五〇六年に成立した連歌師宗碩の『勅撰名所和歌抄出』のことかとも考えられる。

また、次の例は、書名の示し方としては不正確な注である。

廿三日、天竜のわたりといふ船にのるに、西行がむかし（二三ウ）

も思ひ出られて、いとこゝろぼそし。

西行鎌倉へくだりし事、東鑑にもあり。此川の舟

にのりて、西行武士にうたれし事見えたり。

西行が鶴ヶ岡八幡にて頼朝に謁見したことはたしかに『東鑑』に見えるが、天竜川の渡し場で武士に打ち付けられたという説話は、『西行物語』に載るものである。典拠の指摘に正確さを欠きながらも、敢えて『東鑑』という書名を持ち出すところに、やや銜学的な態度がある。⁽²⁵⁾ 次の注では、十七世紀に至って相次いで版本が刊行された『皇胤紹運録』⁽²⁶⁾に言及している。

また、くはこくもんゐんの新中納言ときこゆるは、

くはこく門院、書写のあやまりなるべし。沼運禄にも

不見、又拾芥にもみえず。是は化徳門院をあやまりて

かけるにや。化徳門は拾芥にあり。新中納言女房の

名なり。（四九才）

ほか、長歌のなかの注には、『梁塵秘抄』に言及する箇所がある。

あめつちの 天地也。

ひらけ初し むかしより

開闢のむかしよりなり。

岩戸を明て おもしろき

天の岩戸也。日神こもり給ふ所也。面白きは、日神岩戸

より御かほの少しみえ給ふ時、面白と諸神の宣ひ

し事也。

神樂の言葉 うたひてし

岩戸の前の神樂也。神樂は、是より始まる也。うたひ（五六ウ）』

てしとは、神樂のうたひもの也。梁塵秘抄にあり。

大山には霰ふるらし外山なるまさ木のかつらいろづきにけり

是神樂のうたひもの也。此哥にふしを付てうたふ事也。

此うたひものに、本末あり。猶神樂の事品々あり、畧之。

周知のように、『梁塵秘抄』は明治四十四年に和田英松によって発見されたものであり、『八雲御抄』『夫木和歌抄』『本朝書籍目録』などに書名は見えながらも、近世期の国学者たちは実見することができなかった。浅野日出男は「徒

然草注釈書における『梁塵秘抄』受容⁽²⁷⁾において、『梁塵秘抄』の記事を載せる『徒然草』の、十七世紀に刊行された注釈書はどのように言及しているかを集成して検討した。それを参照すると、聞書注の「岩戸の前の神楽也。神楽は、是より始まる也。」という天の岩屋戸を神楽の起源とする認識は、次の高階楊順『徒然草句解』（寛文元年（一六六一）刊）の注によっているのではないかとみられるのである。

梁塵秘抄は後鳥羽院神楽催馬楽の類をえらびあつめて作り給ふ。後成恩寺殿注あり。神楽は岩戸の前より初まり、催馬楽は国々より馬にて御調物をはこぶ者のうたを表す。

清見潟の里に泊まる場面では、『白氏文集』の一節を想起したという『十六夜日記』本文に対して、聞書注が「鴨長明」の「海道の記事にかけり」と言及する。

いとむつ

かしきにほひなれば、夜るのやど、なまぐさし、といひける人の言葉も、おもひいでらる。

よるのやどなまぐさしとは、鴨の長明がある家にやどりたれば、網釣などいとなん磯物のすみかにや、よるのやどりかことにして、と海道の記事にかけり。その事なるべし。（二九ウ）

ここで聞書注が引用しているのは、『海道記』ではなく、『東関紀行』の「網釣などいとなん磯ものの栖にや、夜のや

どり香ことにして、床のさむしろもかけるばかり也。彼縛戎人の夜半の旅寝も、かくやとおぼゆ⁽²⁸⁾」のことである。『東関紀行』のなかには、日本古典籍総合目録データベースによると、東海大学桃園文庫所蔵本が『鴨長明海道記』、東京大学文学部国語研究室所蔵本、島原松平文庫所蔵本が『鴨長明海東記』の書名を持っている。ちなみに『海道記』についても述べておくと、長明が『海道記』の作者とひろく見なされたのは、慶長三年（一五九八）の細川幽斎の跋を載せる、寛文四年（一六六四）版本からであるとする論考⁽²⁹⁾がある。

早大本だけにみえる書名としては、『和名類聚抄』『河海抄』について言及し、引用する。また、東日記と長歌の間にある長文の注は、『詞林采葉抄』『長哥短哥』の説にほぼよっており、それを一部要約したような内容である。長文のためここには冒頭と末尾のみを示す。

長歌

夫長歌短哥之事、古来ヨリ先達与今同じからず。（五五ウ）

二條家冷泉家ノ分、十七有と見えたり。（中略）所

詮此長哥^{短歌}○の事、始終分明の義、万葉の抄、詞林採

要抄に具也。爰に委細に決メ其詮なし。

早大本だけにある引用文献からは、聞書注の転写の過程で注が増加していったとも、注の成立にあたって記された書名を、早大本のほうが丁寧に留めているからとも考えられる。

聞書注の成立の下限を知るには、早大本には出てこない北駕文庫本の本奥書の書写者も手がかりとなる。北駕文庫

本、多和文庫本の本奥書にみえる「町尻三位殿」は町尻兼量である。『公家事典』⁽³⁰⁾によれば、町尻家は、後鳥羽院から水無瀬離宮跡を託された水無瀬家の庶流で、兼量は後水尾院の命で水無瀬家⁽³¹⁾から町尻家へ養子に入った。また奥書の「正徳二辰年季冬」(一七二二年十二月)は、兼量の孫である、新中和門院近衛尚子(一七〇二〜一七二〇)が中御門天皇に入内することが決定(同年十月七日)してまもなくのころでもあり、或いはこのような事情も、兼量が『十六夜日記』を書写した要因として関わっているのかもしれない。ちなみに、「殿」と兼量自身が記すことは考えられないので、すでにこの奥書をもつ親本は、兼量筆本の転写本だったのだろう。

以上の検討から、早大本の聞書注は、松原が考察したような「中世的なもの」というよりも、近世になって利用可能になった書物を参照したことがうかがえ、そのうち年次の明らかなものは寛文年間に刊行されたものである。先にみたように熱田宮奉獻歌の注の「板の本になし」をも勘案すると、整版本『十六夜日記』の刊行された万治二年(一六五九)から、巻末の識語が示す「寛文十三年」、一六七三年までに成立したと考えるべきであろう。一方、北駕文庫本の本文と注は、本奥書に見える町尻兼量が従二位に叙され、三位と呼ばれなくなった享保二〇年(一七三五)までに固定したものと考えられる。

五 注釈の方法

早大本聞書注は北駕文庫本本と比べてどのような特徴があるだろうか。両本の注にはかなり増減があり、早大本にはあるが北駕文庫本にはない注、そしてその逆もある。早大本だけにある注には、阿仏を歌人、文章家として高く評価し、鑑賞しようとするものが多い。また、日記中に登場する地名が現在(聞書注の成立当時)どうなっているかと

いうことへも関心があり、鎌倉の地理についても知っているようである。また、「おりもなぐさの濱、本哥ありや、見あたらず。（四四才）」という注からは、本歌を捜して歌書を参照している途中であるようでもある。本稿においては紙幅の都合上その全てを検討することはできないが、最後に注の特徴を、古今集注との関連から瞥見したい。

聞書注はやや術学的なところがあるが、ことばの意味を『十六夜日記』の文脈のなかで丁寧に追っており、注が日記を解釈しようとする方法は概ね合理的である。しかし、現代からみるとやや牽強附会ともみえる仕方である、ことばにもうひとつの「義」を読み取ろうとする注がある。次に示すのは大井川を渡る場面である。

かはらは幾りとかや、いとはるかなり。水の出たらん面影

おしはからるゝ。

いくりは幾里也。此川原の間、なんりとかやあり、といふ心也。

またいくりとは、石の名也。詞はいく里といひて、心は石なりをふ

くむなるべし。水の出たらん面影など、今もみるやうなる

詞也。次の哥にいくせの石とよめれば、幾里に石の心も

あるべし。上手の作意なり。（二六才）

「いくりとは、石の名也」というのは、「次の哥にいくせの石」とあることと、『万葉集』の長歌「つのさはふ いはみのうみの ことさへく からのさきなる いくりにぞ ふかみるおふる ありそにぞ たまはおふる たまもなす」（二三五。『夫木和歌抄』『歌枕名寄』にもあり）を根拠としているらしい。聞書注が述べているように、この地の

文は「此川原の間、なんりとかやあり」という意味なのだが、敢えて両義を読み取ろうとするとところに、古今注的な付会をはたらかせている。

先に開書注の成立時期の検討でみた「ふじの山を見れば、煙もたゝず」への注では、不立不斷の両義を述べながら「古今傳受の事なれば、手を付てもよしなくや。(三〇才)」と断っていた。その直後の「くちはてし」歌についても、やはり長柄の橋の（作る／尽くる）の両義にふれながら、注は深入りを避けている。

くちはてしながらのはしをつくらばや富士のけぶりもたゝずなりなば（54）

これも古今の序に、ながらのはしもつくる也、とある所なり。

皇代記曰、弘仁三年三月造^ニ長柄橋^ヲ云々。此義にも

子細あり。右三首の詞皆古今集の口傳也。又家^ノの

異義もまち^ノなり。手をつくべからず。(三二才)

このように古今伝授や古今注に關しての知識をもちながら、それに拘泥しようとしなくても関わらず、大井川の「いくり」については、敢えて両義を読み取ろうとするのである。

六 おわりに

『十六夜日記』が多くの読者を獲得し、日記・紀行の名作としての地位を確立したのは近世になってからであり、

そこで流布した本文は依然として重要である。九条家本には作者の目から見ても書き損じといえるような誤字もあり、古態を示すといっても読解、解釈の際は流布本文によって校訂せざるをえない。そして流布本にも本文解釈上判断に迷うような異同が多く存在する。『十六夜日記』は文献学的に再検討しようとする様々な問題を含んでいる。本稿ではそのなかで近世の受容の一端を示している『いさよひの日記聞書』という注について考察した。本稿で明らかにしたのは次のことである。

現存伝本は早大本、北駕文庫本という二本に代表されるが、伝来と書写者を見るとどちらも阿波徳島が関わっていること、早大本が親本以前の段階で北駕文庫本系統の聞書注と校合したらしいが、直接の書承関係はない。

注と『十六夜日記』本文がそぐわない箇所があり、聞書成立の場において、講釈者のもっていた伝本と、講釈を筆記する者の持っていた伝本に異同があり、聞書注は後者の伝本をもとに書写されていたのが現存伝本、つまり早大本と北駕文庫本と見られること。注の説を述べている人物は、万治二年版本に限らず、複数の『十六夜日記』を披見しているらしい。

松原一義の見方では聞書注の『十六夜日記』本文は静嘉堂文庫本『伊佐宵記』と近接しているとみられていたが、早大本と静嘉堂文庫本を校合してみるとかなりの異同があり、九条家本とも異同がある。

中世にまでさかのぼるような注釈ではなく、言及される人名、地名、書名からは、近世になって利用可能になった書物を参照したことがうかがえ、そのうち年次の明らかなものは寛文年間に刊行されたものであること。整版本『十六夜日記』の刊行された万治二年（一六五九）から、巻末の識語が示す寛文十三年（一六七三）までに成立した。

聞書注は古今集注などの和歌解釈の方法も部分的に受け継ぎながら深入りはせず、一七世紀の出版文化のなかで利用可能になった様々な書物が参照され、中世から近世への転換期における歌書の享受の様相を反映している。特に寛

文年間は歌書の出版点数においても貞享・元禄年間とならんでピークを迎える時期でもある⁽³²⁾。また、静嘉堂文庫所蔵の鈴木弘恭筆書入れ本『阿仏房紀行』が校合し、その奥書を転写した下冷泉為経筆本の奥書や、為経筆本の模写本である実践女子大学山岸文庫所蔵『不知夜記』奥書によると、寛文年間までは奇しくも阿仏尼自筆の『十六夜日記』と見做されるものが伝存していたが、焼失したという⁽³³⁾。『十六夜日記』は一時期、文学史上において感興に乏しく冗長であるなど評価が高くない時期もあったため、最近では「文学」的に再評価しようとする研究が多い。しかし近世の読者がこの作品のどのような点に興味を示し、読んでいたのかという、実際の読書の歴史については、未だ総合的に解明されていない。どのような人々が『十六夜日記』を求め、どのように読み、どのような書物とともに所蔵されたのかということを、今後は注の内容面について、注の成立の背景や、阿仏尼の作品の近世における享受と生成についても考察を進めたい。

〔注〕

- (1) 岩佐美代子「九条家本十六夜日記(阿仏記)について」(『鶴見大学紀要』二九号 一九九二年三月)、↓「宮廷女流文学読解考 中世編」(笠間書院 一九九九年)。
- (2) 田淵句美子「阿仏尼の旅の変容―『十六夜日記』から『阿仏東下り』へ」(『説話論集』一七号 二〇〇八年五月)。
- (3) 久保貴子「『十六夜日記』と『阿仏東下り』―阿仏尼像の変遷」(『実践女子短大評論』二二号 二〇〇一年三月)。
- (4) 『ぐんしよ』一・七号 一九六二年七月。

- (5) 『東京帝国大学附属図書館 和漢書書名目録 増加第二（自明治三十二年一月至全四十年九月）』（一九一一年三月）。
- (6) 『国文学攷』五八号 一九七二年二月。
- (7) 松原一義「北駕文庫蔵『十六夜日記』（注釈書）の解説と翻刻」『調査研究報告』三〇号 二〇一〇年三月）。
- (8) 松原一義「多和文庫蔵『十六夜日記』（注釈書）の翻刻 前編」『四国女子大学紀要』一・二号 一九八二年三月）、「多和文庫蔵『十六夜日記』（注釈書）の翻刻 後編」（同二・一号 一九八二年二月）。
- (9) 「早稲田大学図書館所蔵『いさよひの日記聞書』解題・翻刻」『早稲田大学図書館紀要』六六号 二〇一九年三月）。
- (10) 小川寿一の蔵書印は、中野三敏編『近代蔵書印譜』四編（青裳堂書店 一九九七年）にも収載されている。同書によれば、小川寿一の旧蔵書は京都で売り立てられたという。早稲田大学図書館には小川寿一旧蔵本がほかに七件所蔵される。
- (11) 『源氏物語聞録』全五冊は『古代学研究所紀要』一、四、五、七、八、九、一一、一六、一九号（二〇〇六年二月～二〇一三年七月）に日向一雅、湯浅幸代、木下綾子、芝崎有里子による翻刻があり、兼道の署名部分など一部影印も掲載されている。
- (12) 宮本武史編『徳島藩士譜』（徳島藩士譜刊行会 一九七二～一九七三年）。
- (13) 日向一雅編『源氏物語注釈史の世界』（青簡社 二〇一四年）。
- (14) 『日本古籍書誌学辞典』（岩波書店 一九九九年）。
- (15) 笠間書院 一九七二年。

(16) 以下、基本的に開書注を、早大本によって示す。私に句読点と濁点を付し、丁数と丁移りを示す。早大本には本文同筆の(つまり親本以前の段階で付された)濁点が一部ふされており、そのままに示す。長い注は一部「(中略)」で省略した。画像は早稲田大学図書館 [WING](#)、古典籍総合データベースにて公開中である。

(17) 松原一義「今治市河野美術館蔵「不知夜記」(仮題)をめぐる一付・天理図書館蔵『阿仏記』のこと」(伊井春樹編『日本古典文学研究の新展開』笠間書院 二〇一一年)。

(18) 森井信子「静嘉堂文庫蔵「伊佐霽記」の位置付け」(『大妻女子大学大学院文学研究科論集』六号 一九九六年三月)、「静嘉堂文庫蔵本『伊佐霽記』の位置付け2」(同七号 一九九七年三月)。

(19) 森井信子「静嘉堂文庫蔵本『伊佐霽記』の位置付け2」。

(20) 九条家旧蔵本の本文は岩佐美代子「翻刻 九条家本『十六夜日記(阿仏記)』—残月鈔本・尊経閣本『阿佛假名諷誦』対照—」(『宮廷女流文学読解考 中世編』) によった。

(21) 松原一義「十六夜日記」注釈書の新資料の報告—多和文庫蔵「十六夜日記」—。

(22) 『小田原市史 通史編 近世』(精興社 一九九九年)。

(23) 山本登朗『伊勢物語論 文体・主題・享受 新装版』(笠間書院 二〇一七年)『伊勢物語集注』の位置。

(24) 瀬尾博之『伊勢物語集注』の注釈態度について—好色批判の観点から—(鈴木健一編『江戸の「知」—近世注釈の世界』森話社 二〇一〇年)。

(25) このような書名を誤認する注は、日記冒頭の「むかしかべのなかより、もとめでたりけん文の名をば」についての注「漢の高祖の時、壁中より論語といふ文をとり出して、今の世まで傳はれり。こゝに文のなをばとけるは論語をさしていへり」にも見られる。正しくは、『古文孝経』である。

- (26) 小倉慈司「研究ノート『本朝皇胤紹運録』写本の基礎的研究」(『国立歴史民俗博物館研究報告』一六三号 二〇一一年三月)。
- (27) 『梁塵研究と資料』二号 一九八四年十二月。
- (28) 『東関紀行』の本文は、新日本古典文学大系『中世日記紀行集』(岩波書店 一九九〇年)によった。
- (29) 奥村哲也『海道記』鴨長明作者説の周辺」(『岐阜大学国語国文学』二八号 二〇〇一年三月)。
- (30) 橋本政宣編『公家事典』(吉川弘文館 二〇一〇年)。
- (31) 兼量の曾祖父にあたる水無瀬氏成は、てにをは論書などをものしている。川平ひとし「(翻)資料紹介水無瀬氏成伝・和歌テニヲハ論書」(『跡見学園女子大学国文学科報』一四号 一九八六年三月) 参照。
- (32) 神作研「歌書の変遷―江戸前期を中心に―」(『国文学研究資料館調査研究報告』三〇号 二〇一〇年三月)。
- (33) 久保貴子「山岸文庫蔵『不知夜記』解題・翻刻」(『実践女子大学文芸資料研究所年報』二四号 二〇〇五年三月)。

付記 所蔵典籍の閲覧調査の許可を賜った静嘉堂文庫と早稲田大学図書館に厚く御礼申し上げます。

Izayoi-no-Nikki Kikigaki another reception of
Izayoi-no-Nikki in early modern period

IKUURA Hiroyuki

IWASA Miyoko revealed that the manuscript formerly possessed by the Kujo family is the best manuscript for literary study of *Izayoi-no-Nikki*. However, the texts of popular edition are also significant in reception history study since it was distributed widely in early modern period when this work was acknowledged as masterpiece of travel writing. While *Izayoi-no-Nikki Zangetsushō* is famous as annotated edition wood-brock printed book, *Izayoi-no-Nikki* owned by Tawabunko library and Hokugabunko library contain another annotation made by 1712. Recently Waseda University Library has stocked an annotated edition manuscript titled *Izayoi-no-Nikki Kikigaki* transcribed annotation same as that owned by Tawabunko and Hokugabunko. It records colophon in 1673 and contains an annotation that "This one line lacks in wood-brock printed edition book (printed in 1659)" in variant part of a text that differs from popular edition. The variant text is contained in the manuscripts formerly possessed by the Kujo family, that owned by Matsudairabunko Library of Shimabara Library, and that owned by Seikado bunko Library. The annotated edition of *Izayoi-no-Nikki* refer to various book printed in 17 century. It tells us another reception history of *Izayoi-no-Nikki* in early modern period.